

週刊金曜日

編集長様

2012年11月 1日

釜ヶ崎日雇労働組合

執行委員長 山中秀俊

抗議文

貴社の10月5日発売914号の「大阪・西成署は捜査する気があるのか」(釜ヶ崎の医師、矢島祥子さんの不審死を追う)という掲載記事に抗議します。

「週刊金曜日」は「スポンサーや広告主に阿らずに市民の立場から主張できるジャーナリズム、権力を監視し物申せるジャーナリズム」「日本で唯一のタブーなき硬派な総合週刊誌」として真実を伝え、多くの市民運動家、労働者、大衆の支持を得ている雑誌と認識しています。

私たち釜ヶ崎日雇労働組合も、多くの運動の場面で読者会のみなさんとともに闘ったり、支援されたり、支援したりしています。

しかし、この佐藤万作子氏による記事は、元兵庫県警の刑事で今は探偵を生業としている飛松五男氏の、自分たちの都合により釜ヶ崎に対する差別意識を振りまきながら、生け贄をデッチあげ、マスコミを使って「犯人」を創り出そうとする一方的な「殺人事件」キャンペーンに与するにすぎず、事実を伝えてはいません。

飛松五男氏は職業的(営業的)欲求からか、ご遺族の「自殺であってほしくない」という強い願望に付け込んで次々に架空の事件をデッチあげて、「殺人事件」を描き出そうとしている人物であり、その発言の信ぴょう性は全くありません。

私たちは、ご遺族が矢島祥子医師の「死の真相を知りたい」と願うのは至極当然の願いであり、正当な想いだと思います。しかし、実際は、ご遺族の「自殺であって欲しくない」という思いを前提に、科学的捜査や事実を積み重ねることなく『前提』にあっているかどうかで情報は取捨選択されるかたちで「真相究明」が進められています。

一. 佐藤万作子氏による記事は、警察が自殺の一つの根拠とした絵葉書を、飛松氏の脚本

に誘導された矢島敏氏の取材をもとに、元交際相手を「交際相手を自称する男性」にし「特別意味があるとは思えない」と一蹴します。

元交際相手とはわが組合員であり、信頼を置ける人物です。矢島先生との交際関係は生前のメールのやり取りだけでも明らかなはずであり、ご遺族にも数ヶ月間のやり取りの記録を転送してあるのでご遺族は当然知っています。警察は当然、電話会社のサーバーから記録を抜き出しているでしょうから事実関係をつかんでいるでしょう。

交際関係があったのとなかったのではハガキの評価が大きく変わり、死因の判定に大きな影響を与えるので飛松氏は「自称恋人」といい、発言に信ぴょう性のない人物、事件関係者としてマスコミに報道をさせるのです。自分たちに都合の悪い真実は隠して、ウソをついています。佐藤万作子氏の記事は一方的な取材のみで何ら真実を伝えていません。

二. 私たちは、「真相究明」と称し、飛松氏が自己の営業活動のため、古くからある市民の差別意識を利用し「殺人事件が起こっても不思議ではない街」として「釜ヶ崎・西成区」を描き出し、生け贄をつくりだし、「犯人」をデッチあげようとしており、その脚本に基づき、マスコミを動かしキャンペーンを張っていると思っています。

彼らは言います、「釜ヶ崎は怖いところだ」「貧困ビジネス、そして殺人などの犯罪特別保護区となっている」「釜ヶ崎では年間600体以上の不審死体があがる」「釜ヶ崎のある人は“釜ヶ崎は死体を捨てにくる場所になってしまう”と言」った。「この土地ではおかしいことがまかり通っている」と。これは事実と反しています。彼らの主張をとおすための不当な差別キャンペーンです。佐藤万作子氏の記事はこのキャンペーンに協力しているといえます。

三. 既成マスコミは、ほとんどが飛松氏の創った脚本どおりの報道を行っていますが、とりわけテレビ朝日系列は、飛松氏あるいはご遺族との特別な関係があるのか、飛松氏とタッグを組んでいるかのように、ちょっと注意深く見ると明らかにヤラセとわかる特集をなんどもなんども組んで、報道しています。佐藤万作子氏の記事はこのヤラセ報道に加担していると思えます。

四. 飛松氏はそのブログや著書をとおして、「大阪府警-西成署はぜんぜん捜査をしていない」と言っていますが、この件に関して矢島先生に近しかった多くの人たちが事情聴取を受けています。「矢島さんは拉致された」とする彼らの主張に基づき所有車両を検査(鑑識)された者、警察の要請でポリグラフ(俗に言う嘘発見器)での検査まで受けた者まであります。近しかった多くの人々が捜査に協力をしました。佐藤万作子氏の記事は不当な

飛松氏の営業活動に加担しています。

五. しかし、これらの人々が「自殺では」と疑うと、「疑わしい者」「犯人の協力者」「犯人グループ」「犯人」などとレッテル張りをエスカレートし、遠ざけてきました。

いまでは一部患者さんを除き「真相究明」を支援する人たちの中に、生前の矢島先生をよく知っている者、ともに活動していた人、ともに仕事をしていた人たちはほとんどいません。前提として「殺人だ」と認めることを踏み絵にしているからです。

飛松氏は自説(脚本)をこじつけようと「行政・外郭団体・病院・NPO 団体・ふるさとの家(矢嶋先生がミサに通っていたカトリック団体)・警察・暴力団が相互支援癒着し、貧困ビジネスを展開している」というまさに妄想としか思えない、荒唐無稽な説を振りまき、長年貧困ビジネスと闘い、失業・野宿問題に取り組んできた者たちを侮辱し、愚弄しています。

ご遺族の心情に付け込んだ飛松氏による脚本です。飛松氏を持ち上げる佐藤万作子氏の記事は飛松氏の不当な営業活動に加担しています。

六. 矢島先生の患者さんには精神的疾患を抱えていたり、病歴を持つ患者さんが少なからずいました。ボランティア活動を通じては野宿生活をしている人たちとの付き合いがあり、フレームアップの対象として格好の人々が周辺にいるのです。家族のきずな、職場の絆、近所の絆、と周囲に権力の不当な扱いから守ってくれる『絆』を持たない者は、フレームアップの格好の対象だというのは歴史が証明しています。

西成警察がどういう警察かを身を持って知っている私たちはそのことを一番恐れていましたし、今も恐れています。「釜ヶ崎にどんな事情があろうが、なにがあろうが、そんなことは関係ない。」と行って強引に進められる「真相究明」はテレビ朝日系列を筆頭にマスコミを動員し、国会議員を動かし、世論操作で警察を追い込み、デッチあげ「犯人」を創りあげていく可能性を十分に持っています。

現在「怪しい」「犯人関係者」としてマスコミで報道され、デッチあげられている「自称交際相手」は釜ヶ崎労働者の組合的団結で守られているので心配ありませんが、元患者や失業・野宿の仲間が、孤立した状況に付け込まれ、追い詰められた警察にフレームアップされる危険性はまだまだあります。佐藤万作子氏の記事は飛松氏のデッチ上げに加担しています。

矢島先生が「西成のマザーテレサ、さっちゃん先生と慕われてきた」というのは明らかにマスコミのつくりごとですが、患者さん、同僚、ボランティア仲間などから尊敬を集め慕

われていたことは事実です。マスコミは「純粋・無垢なやさしい無力な女性医師が、釜ヶ崎で犯罪に巻き込まれた」と描き出します。

しかし、釜ヶ崎でボランティア活動をする女性たちは言います。「女性が釜ヶ崎で活動するには強い決意と継続する意志がいる、そんな強い意志を持った矢島先生が犯罪に巻き込まれたときに何の抵抗もしないで殺されるわけがない」「矢島先生の意味・活動を評価せず、バカにしている」と。

佐藤万作子氏の記事は、なぜか平凡なのっぺりとした、何の情熱も感じられない記事になっています。一連の著作・レポートからすれば、その情熱のカケラさえない、生計のために「こなし」記事という印象が漂っています。簡単どころに簡単な取材をし、真実を伝えようというものではありませんでした。

西成区、釜ヶ崎の住民にとってこの事件は大きな問題を抱えています。ご遺族の大病院を経営しているその財力と社会的地位を使って、事実を捻じ曲げ、自己の欲得のために、他者を犯罪者に仕立て上げようとし、差別を振りまく飛松氏に「週刊金曜日」が利用され、加担するのは私たちにとって耐えがたいことです。

捜査権のない私たちには、矢島先生の亡くなられた本当の理由はわかりません。私たちが知る限りの情報では「自死の可能性が高い」と思っています。それでも説明できないことはあります。しかし、報道されている「証拠」「新事実」の多くがウソだということも知っています。

私たちは事実を隠したり、都合のいい解釈の上に「真相究明」は無いと思っています。まして、「真相究明」の名のもとに「釜ヶ崎にどんな事情があろうが、なにがあろうが、そんなことは関係ない」とばかりに、他人を「犯人」「犯人グループ」「協力者」と何の証拠もなしに決めつけ、「世論」を誘導していこうとするやり方、偏見を利用し差別を煽動していくやり方は許せません。

10月5日号の記事は真実を伝えていません。商業マスコミに追随し、本質は、過去において、特別公務員暴行陵虐罪・職権乱用罪など法を遵守する気持ちなどまるでない無法警官であった「正義の熱血探偵」の営業活動に協力するものです。週刊金曜日がこれでは商業マスコミとなんら変わらず、週刊フライデーなみになってしまいます。

週刊金曜日の偽証掲載、飛松五男指揮するマスコミキャンペーンを利用した「犯人」造りへの加担、キャンペーン協力に断固抗議します。

「真実を報道する」姿勢の堅持を期待します。